
Beast Crowd

マレード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beast Crowd

【Nコード】

N1914J

【作者名】

マレード

【あらすじ】

暗い、腐臭のただよう牢屋の中で過ごす獣少年 深と率。
いい加減、こんな所にいるのは嫌だ。
なら、抜け出そう。人間なんか、怖くないんだから…。

そんなこんなで、始まり 始まり。

1:プロローグ(前書き)

…エピソードごじが…

1：プロローグ

「なあ、率^{りつ}。オレらは…ずっと、このまま、人間の思うがままに生きて生きていくのか？」

暗闇の中、深^{しん}はぼそつと言葉をもらした。

「さあ、な。人間にとって、オレらは危険なんだよ。でも、実験のしがいがあるから、生かしておく。

どうでもよくなったら、きつとぼいっただぜ。いや、ぼいは危険だから、殺すんじゃないか、毒ガスとかで」

「なるほど。毒ガス」

もしも そうなら、人間って馬鹿だな。オレら獣をなめてあがる。

毒ガスごときで死ぬか、ぼけ。

つとに、うぜえ うぜえ。さっさとこんな所抜け出したい…。

「あ」

…できるかも。

てか、なら何でオレらはこんな所でびくついてんだよ。何で人間ごときに。

「そっか」

イスだ。

三日に一度、オレらは実験のために外へ出される。その時、変なイスに座らされて こー、びりびりってなって記憶が飛ぶんだ。それ

で、次目覚めた時は牢屋の中。脱出しようって意思を奪う。それで、『脱出って何？おいしいの？』みたいになっちゃって、今まで牢屋で大人しくって訳か。

「何だよ、一人で『あ、そっか』って。意味分かんないんだけど」

「いや、ここ脱出しようと思って」

「ふう〜ん。そっか、脱出ね」

「…それだけ？」

オレがこんな意思を持ったから、率も持ったもんだと思ってたんだけど。

「いや。賛成」

「おっ！」

「誰が 好んでこんなクツセエ クレエ所にいるか」

「だよなだよな！よし、今夜決行！！」

「今夜な。そろそろ 人間来るぞ」

「おうおう、匂いがぶんぶんする。三人ずつかぶり付くか。まずそ
うだから、食わねえけど」

「同感。綺麗なお姉さんとかはウマイんだけどな。あんなの、お姉
さんとはほど遠い」

その深の声と共に、お姉さんとはほど遠い人達の靴音がした。

「さあ、始めようか 率」

「おじ」

2：まずは挨拶代わりに

ガチャン！

カギの音と共に、六人の人間が入って来る。

こいつらは、オレらが脱出しようという意思を持ったとは思ってないらしく…かなり無防備だった。
漆黒のスーツ、それだけ。

「行くぞ。立て」

「言われなくても分かってる」

フン、と鼻を鳴らして立つ深に對してかなり驚いているようだ。今まで深も率も口を開いた事が無いから、無理も無いが。そしてオレ達は目を閉じて丁寧に手を合わせ、

「「いただきます」」

等と言ったりする。

「…は？」

相手はこれから何が起こるかなんて、知るよしも無くすっとんきょんな声を上げる。

オレ達は、静かに目を開いて、ニヤッと笑った。

「マズイと思うけど…まあ、体力つけるためだから我慢するよ。エライ？」

この悪魔のような深の笑みをどう思った事だろうか。命が危ないって事位は…分かったと 思うけれど。

その中で一番ノンキそうな奴。…見つけた、右から三番目…。今だにぼかんとした顔をしている。

『オレのターゲットは、右から三番目』
率に口の動きを伝えると

『オレは、真ん中。奴がこの中のボス格だ。あいつをどうにかすれば、回りはどうすればいいか分からなくなるはず』

『了解』

「つまりは時間稼ぎだね」

「そーゆー事」

「…？お前ら、何を…うぎゃー！」

情けない悲鳴を上げて、三番目は倒れた。そいつはそれなりにたくましい体つきをしている。

けれど所詮人間。倒れた拍子に頭を打って気絶した。真ん中も同様。

「ボス、大丈夫ですか?!」

「ボス!!!」

成る程、本当にあいつがボスだった訳ね。

「ボスに何て事を！」

熱く燃え滾ったような奴が一人、こっちへ向かって来る。

「何て事をしてんのはお前らだろぼけえ！」

イラつとした率がそいつの顔面に向かって膝蹴りを入れる。

「ぐえつ」

「あはは、変なの。率、そいつ息してる？」

「してない。ホント、もろいな」

見下したような視線をそいつに向けてふん、と鼻で笑った。

「次は誰が殺されたいですかああ？」

につこにつこしながら後ろを見ると、

「あれえ？皆気絶しちった」

気持ちよさそうに、仲良く気絶。

「ださ。深、行くぞ」

「はあい」

じゃあね、腐ったクズ以下のクソ野郎共。

心にそう伝えて、死者 一人 ケガ人 二人 心の病 三人を出し、二人はこの場を去った。

2…まずは挨拶代わりに（後書き）

本当に、この子達は礼儀を知りませんね（笑）

3：二人の逃亡劇

毒舌という毒舌を吐きまくった二人は、ひたすら走った。ケモノってだけあって、凄いスピードである。勿論、人間が追いつける訳が無い。

とにかく走って走って走って。

口や手に付いた血を拭って。ああ、何で道別れてんだよ！！

「あ、そのすげーキレーなお姉さん！出口はどっち？」

「右だけど。…あら、可愛い」

このお姉さんはきっとオレ達の事を知らないんだ。知ってるのは上層部だけなんだろうな。

それが災いしたな。それと率の容姿が良いのは本当に得した。そんな事を考える深だつて、人外な可愛さを誇っているのだけれど。本人達は全く自覚していない。きつと容姿の恵まれない人にはただの皮肉にしか見えないだろう。

「その次は左行つてまっすぐよ」

「ありがと、お姉さん！お姉さんの事は忘れるまで忘れないよ！！
絶対！」

理解しがたい日本語を吐いた深はそのお姉さんの首筋にキスをした。そして率まで。

あまりに気持ちが悪化したせい、そのお姉さんは気絶してしまっ
た。

そして首筋には二つの傷跡があった。

4：脱出

「あのお姉さん：おいしかった」

「ああ：流石美人だな。つて！お前どんだけ飲んだんだ？！」

「え？ガブつといただきましたが？何か」

あほか！！そんな事したらばれるだろうがよ！

まあ栄養補給もしたし、これで百五十キロ位は走れるな。

率は自分の頬をぺしぺしと叩いて気合を入れなおす。

そして立ちほだかるは、二十メートルはあるうかと思えるほどのつかい鉄のドア。

「ひゃく人間つて変な事に金使うのな。勿体ない。今から壊されるつて言うのに」

怪しげな笑みをたたえてドアにすつと片手を当てる。そのままぐつと力を入れるとあつと言う間に壊れた。

「流石、力の達人」

「あははっ。これ位なら、率だつて出来るでしょ？ほら、待てえええつて人間が来るから、さっさと出よう」

「そうだな。しばらくは足止め出来るし」

行きますか。

パンつと互いの手のひらを合わせると、絶対にはぐれない為に繋い

だ。

5：正体…それは。

「はあっ…はあっ…ああ…」

あれから何キロ走ったことか。少なくとも二百キロは走ったであろう。いくらケモノでも結構キツイ距離である。

「ここで…休もう」

「だな…。あー疲れた」

ため息をつきながら、ベンチへと横たわる。

心臓が凄い勢いで脈打っている。そりゃあ、死ぬんじゃないかって位。

疲れた…。

頭の中に浮かぶ事と言ったらそれだけ。余分な事は考えられなかった。

けれど…しばらくして落ち着いてきた頃、大事な事に気付いた。

「なあ、これからどーすんだ？」

「は？知るか」

「どーすんだよ」

「だから、知るか…！」

今更のように自分の計画性のなさが憎たらしくなってくる。

あゝくそっ！…！どーすりゃいいんだ。

率はかなりやけになっていた。だから…嗅覚がオレ達以外のケモノ
のにおいをとらえた時は、本当にびっくりした。

「率…ケモノのにおい」

「ああ…。何で…」

自分でそう言いながらも、予測はついていた。
ただ、違ったら。…違ったら、深が悲しむ。だから、言わない。
否、言えない。

5 : 正体…それは。(後書き)

わあゝ中途半端だなあ、終わり方。

6：正体は二人

「え……？……ええええええええ？！」

…深はとりあえず叫ぶ事にした。だってそれしか出来ないし。

「ああああ！！深兄！！！」

そして正体も叫び…。

深兄なんて呼び方をするのは世界に一人しかいない…。

「空……！！！」

深のたつた一人の兄弟、肉親。

五年前に忽然と消えてしまった弟。

そしてもう一人は…

「誰？ですか…」

多分、いやかなり失礼なんだろうけど、仕方無い。知らないもんは知らない。

空の後ろに立っている長身の…少年？それとも青年？分からない。

「あー、オレは空と一緒に消えた仲間って所かな、うん」

「名瀬 改。言うなら、友達」

「そんな感じ」

本当に仲良さそうに話す所を見ると、今までも楽しくやってきたんであるう事がすぐに分かった。

あ、そうだ…ついでに

「住む所探してて。知らない？」

「知ってる」

改が即答。

この二人の言う話をまとめると…

とにかく人間じゃ無い人達の集うマンションがあるらしく、空と改もそこに住んでいるとの事。

「なら、そこでけって」

「オレは遠慮する」

決定、
と言おうとした時
そう言った人物が、
一人…

6：正体は二人（後書き）

投稿遅れてすみません…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1914j/>

Beast Crowd

2010年10月15日22時43分発行